

修身初訓

三

會友校師福

書2943圖

部

番號

冊數

年

8

1

月

11

2

日

T 1A1

22

Mi 77b

30

<3

So 11  
(3)

修身初訓卷之三

緒言

是初等生第三年前期ニ教シカ為、設  
シ者ナリ、其科目ヲ分テ四章トス、孝悌、  
慈愛、言語、容儀ナリ、前篇ニ比スルニ、  
文意少シク高尚ナリ、其履行ニ於ル益  
勉勵スヘシ、

明治十五年

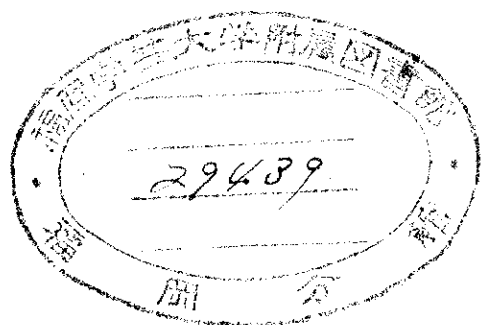
編者識

修身初訓卷之三

宗 盛年編輯  
宮本茂任校閱

第一章

○孔子曰く、身體髮膚、これを父母に  
受く、敢て毀傷せざるを、孝の始なり。  
身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、  
以て父母を顯すを、孝の終なり。



夫孝ハ親ニ事ふるニ始マレ、君ニ事  
ふるニ中ヨリ身を立てるニ終ル。  
天子より庶人に至るまで、孝終始ホ  
ウシテ患ヒ及ハざるものハ未ダレ  
阿ラざるナレ。

○孝子の深愛あるものハ必和氣あ  
リ、和氣阿るものハ必愉色阿リ、愉色  
阿るものハ必婉容阿リ、孝子ハ玉を  
執るウ如ク、盈るを奉ぐるウ如ク、洞

ク屬ク然トシテ勝ヘざるウ如ク、將  
ふ之を失ふんとするウ如ク、嚴威儼  
恪ハ以テ親ニ事ふる所ニ阿ラレ、  
○父母ニホツカフテ常ニ力を盡シ、  
下ノつとめ怠ラレ、古語ホ、夕ニ定め  
テ朝ニ省ると云る、如クすヘ、  
常ニ養ひをかヘ、  
飲食の味をヨ  
クシテ、自ら寒暖の節を嘗ミテ、  
むツ、  
同上

冬も暖み、夏も涼く、出れ、告げ、  
歸き、対面し、色を和らぐ、父母  
をよろこばしめ、父母の身を養ふ、二  
つのつやめ、関く、一から、是、か人  
の子たるもの、定りたる法なり、同上  
○司馬君實曰く、凡そ諸の卑幼、事大  
小となく、専ら行ふにやを得ること  
なれ、必家長より咨稟せよ  
凡そ父母の命を受けて、必籍より記し

て之を佩ひ、時より省りて速く之  
を行ひ、事畢らば則命を返せ、  
或る命ある所行ふ可らざるもの、何  
ら、則色を和らけ聲を柔く、是  
非利害を具して之を白し、父母の  
許せざるを待ちて、然後之を改めよ、  
若し許さずんば、苟も事小大害なき  
者、亦當さる曲従すべし、若し父母  
の命を以て非として、直ち己の志

を行く、執る所皆是なりと雖、猶不順の子とす、況んや必いず、是あらざるをや、

○弥四郎ハ、筑前國夜須郡朝日村の農夫あり、家貧ゆゑ、朝夕火を擧るこゝ難し、然きとも天資篤實、父母ハ孝養の志深く、父死して追孝を固よりなり、母はつかふる由や、父ハ異らに、或時母病あり、晝夜衣帶を解す保

護し、衣類の澣濯ふ至るまで、懇小之を取り、母遂に八十三歳にて死せり、

弥四郎父母の喪に、哀慕をかはし、忌日毎ふ、必墓に謁し、生ふ對する如く、談話して、少時を去ふ忍びず、弱齡より牛馬をも勞せり、飯をも米も、中なく、以てある農事の忙しき時も、鞭を以てす、其稟質粹美ゆゑ、孝

心ふかく上を  
敬ひ人を阿も  
れみ一族を固  
よまなり諸人  
ふも睦し是ふ  
化せられて一  
村の風俗おの  
づから淳厚ふ  
なりたる



其篤行是の如くなれハ屢褒賞を得  
て遂ふ生涯租税賦役をも免され  
のみならず藩主黒田氏今様の曲を  
作り歌へり誰う圖らん或時仁孝天  
皇禁中ま在りて其曲を歌はせ給ひ  
とかや僻遠なる筑紫の賤き農夫  
の事を禁中ま在りて歌はせ玉ひ  
も豈孝感のいたす所ならんや  
○曾子曰く人の生るゝや百歳の中

疾病あり、老幼あり、故に君子も、其復  
きへからざる者を思ふて、先づ施す。  
親戚既没らば、孝を欲すと雖、誰か爲  
ふか孝せん、年既耆艾ならば、悌を欲  
と雖、誰か爲ふか悌せん、故に孝も及  
ばざることもあり、悌も時ならざるこ  
とありといふ、其斯の謂う、  
○兄弟を形を分ち、氣を連ぬる人な  
る、其幼きふ方りてや、父母左提右挈、

前襟後裾、食は則ち案を同うし、衣は  
則ち傳へ服し、學べば則ち業を連袂、遊べ  
ば則ち方を共ふす、悖亂ある人と雖、相  
愛せざる能はざるなり、願ふ家訓

○有馬頼永藩中ふ令し、節儉を行ふ  
おとを告げ、諸事にか省約なり、其弟  
孝五郎、四書大全の善本を、あつた  
んと欲す、其傳福永万次郎、これを参  
政ふ告ぐ、参政方ふ節儉を行ふを以



て聴かず、從來の古本あり、可なりんと云ふ、頼永こそを聞き、孝五郎文學小嚮ひ、善本を得んと欲せらるゝを喜々しき事なり、節儉を此等の謂ふ非ず、隨意に購はるべしと言へり。○北魏の楊椿、その弟津と友愛最も厚し、兄弟毎旦廳堂に聚り、終日相對し、未嘗内ふ入らず、一の美味あれども、集らさきハ食ハル、廳堂の間、幃幔

を以て隔障し、時ふ就きて、寢息の所とす。

椿年老い、曾他所より酔てかへる、津扶持して家ふ還り、寢室の前ふ假寢し、安否を兼ね候ふ。

椿津年六十を過き、並ふ台鼎ふ登る、而るふ津常は旦暮参問し、椿坐を命せさきハ、津敢て坐せし、椿近く出て、或る日斜ふして至ら

され、先づ飯せす、椿還るを待て共  
ふ食ふ、食へば則津親ら匙箸を授け、  
味皆先づ嘗む、椿食を命じて、然して  
後ふ食ふ、

津肆州の刺史となる、椿京の宅に在  
り、四時の嘉味ある毎に、使の次ふ因  
て之を附す、若し或る未だ寄せさき  
ハ、先づ口ふ入きす、一家の内、男女百  
口、多あ爨を同うし、聊間言なりし、

## 第二章

○曾子曰く、孝子の老を養ふや、其心  
を樂ましめ、其志ふ違ふす、其耳目を  
樂ましめ、其寢處を安し、其飲食を以  
て、之を忠養ふ、是故ふ父母の愛する  
所を、亦これを愛す、犬馬ふ至ても盡  
く然る、志うるを況んや人ふ於てを  
や、

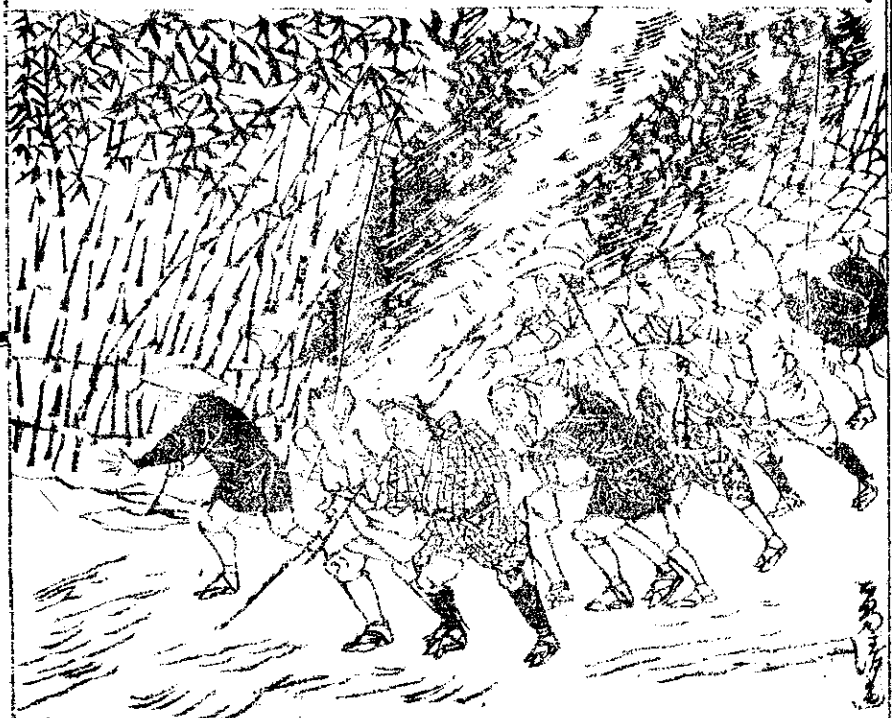
○家ふ居てば、廣く人を慈愛し、善を

行ふへ、廣く人を慈愛することや久  
く、天の悦び深くして、福を受ける  
こと疑な、天道を還すおやを好む、  
善を行へ、福を下し、惡を行へ、禍  
を下す、此理必違はざるなり、家道訓  
○寛保壬戌の歲、関東大水、武州入間  
郡最も其害を受く、民舎湮没、数十里  
小亘る、奥貫友山、食を舟に載せ、僮僕  
と漿して、餓者に飲食せしめ、病むも

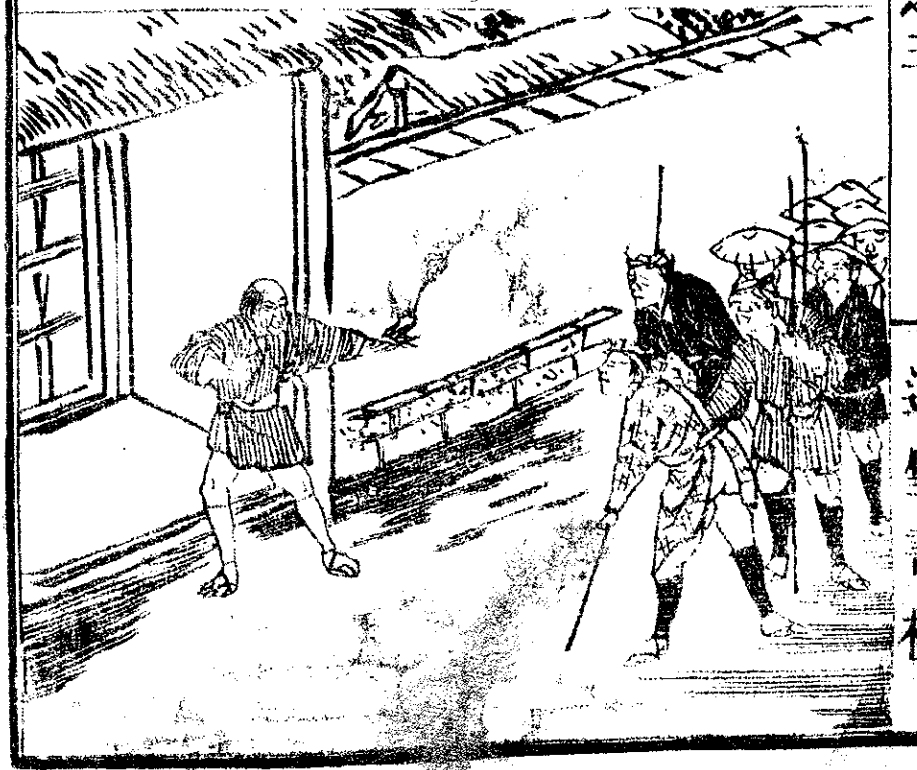
のハ、悉く之を載せて還り、已に家小  
撫養することや數百人、因て其父は請  
て曰く、大人平生兒を誨へ、儉を力め、  
用を節よせしむ、豈今日の急あるを  
為め、願くハ家世の積聚を傾けて、  
以て之に當ん、父喜て之を許す、  
是に於て大に倉廩を發き、飢民は施  
與す、流民男女、傳へ聞て争ひ至り、門  
前市の如く、友山多く粥を作りて、奴

僕の茶議なる者、數人を擇ひて之を  
待たしめ、又人ことふ米四升を與へ  
て行しむ、受る者感謝せざるハなし、  
既ふして廩盡く、又人をしめて金を四  
方ふ齎らし穀粟及び大豆蕎麥を買  
ハしむ、金又盡く、又父は請ひ田宅を  
富商ふ質し金を得て之を繼く、十月  
より翌年四月ふ至りて止む、惠施及  
ふ所四十八村、終始すくふ所十一万

六千餘人なり、  
後明和中武藏  
相摸上野荒饑  
し、姦民相あつ  
まゐりて盜をか  
し、富商を劫奪  
し、民舎を毀壞  
し、暴亂をかば  
たり、まじふ友



山々家ふ及ハ  
んとす、一人走  
り至り、大ふ其  
徒を呼て曰く、  
是我々奥貫翁  
の居なり、昔寛  
保の水災、翁あ  
るを以て、我々  
祖父母兄弟を



して生存することを得せしむ、汝お  
きを知る、衆大ふ駭ま、相顧みて曰  
く、我儕縦ひ力の恩を報ゆるな  
くも、反て虐すへけんやと、門外ふ倚  
伏して去る、故ふ其四鄰、まことき  
為ふ、暴亂を免る、  
○齊の景公、壽宮に遊び、長年の薪を  
負ひ、饑色あるものとする、公おきと  
悲し、喟然として歎いて曰く、吏ぞ

てこれを養う。めん、晏子曰く、臣は  
きをまく、賢をたのしんで不肖を哀  
む。國を守る本あり、今君老を愛ん  
で、恩逮はさるゝとあり、國を治むる本  
あり、公笑て喜ふ色あり、晏子曰く、聖  
王賢を以て賢を樂み、不肖を見  
て以て不肖を哀む。今請ふ老弱の養  
はます、鰥寡の室あらざるものを求  
めて、論じて秩を供せむ、景公曰く、諾

是ふ於て老弱養ふことあり、鰥寡室  
あり。

### 第三章

○孔子曰く、言行ハ君子の樞機、樞機  
の發を榮辱の主なり、言行ハ君子の  
天地を動す所以なり、慎まざるべけ  
んや。

○孔子郷黨ふ於てハ、恂々如たり言  
ふこと能はざる者ハ似たり、其宗廟

朝廷ふ在ても、便々として言へり、唯  
謹めるのみ、

○孔子曰く、與ふ言ふへくして、之と  
言はさきハ人を失ふ、與ふ言ふ可ら  
ずして、之と言ふも言を失ふ、知者ハ  
人を失はむ、亦言を失はむ、

○子貢曰く、君子ハ一言以て知とし  
一言以て知あらずといふ、言慎まざる  
可らざるなり、

○孟子曰く、言通ふて情遠きもの  
ハ善言なり、守約ゆて施ふこと博  
きものハ善道あり、君子の言、帶を下  
らずして道存す、

○司馬牛仁を問ふ、子曰く、仁者ハ其  
言や、詛ふ曰其言や、詛ふ、此き之を仁  
と謂ふ、曰く之をすること難し、之を  
言ふこと詛ふことなきことを得ん  
や、

○我々言語、吾々耳自聽くへー、我々  
舉動、吾々目自視るへー、視聽既小心  
小愧ぢされハ、則人も亦必服言志  
晩録  
○言語多寡を問ふた、時中を  
要す、然る後人其言を厭ハす、言志  
奎録  
○人の言を聽くハ、多きを厭ハす、賢  
不肖となく、資益あり、自言ふハ、則多  
きことなかれ、多けきハ、則言過あり  
同上

天地間の靈妙、人の言語ふく者か  
禽獸の如きハ、徒ハ聲音ありて、僅  
小意嚮を通するのみ、唯人ハ、則言語  
ありて、分明小情意を宣達す、又抒  
て文辭となせハ、之を遠方小傳へ、後  
世小告へー、言志  
後録

○言ハ微より起りて、用たること博  
からんとす、能く道小違ハす、て化  
すべく、令すべく、告くべく、訓へて以



て生物ふ推すつ、其縦みて慎おさるふ及て、反て禍をおす、韓退之

○王文正人と言笑すること寡、其語簡と雖も、能理を以て人を屈す、默然たること終日、能く其際を窺ふものなり、事を上の前ふ奏するふ及て、群臣の異同、文正徐ふ一言て以て定まる

○胡文恭人となり清儉謹默、内剛

て外和す、群居て笑語謹譁す、獨顏色を正う、温々て聲氣を動さす、人と言つハ必思ふて後ふ對ふ、故ふ官ふ蒞し事ふ臨む謹重ふて輒く發せず、發るも亦回止す可らば、其趣ハ仁厚ふ歸するを要す

#### 第四章

○曾子曰く、君子の道ふ貴ふ所の者三つ、容顏を動かかて、斯は暴慢ふ遠

さるる、顔色を正うて、斯ふ信ふ近  
つき、辭氣を出して、斯ふ鄙倍ふ遠さ  
かる、

○足の容ハ重く、手の容ハ恭しく、目  
の容ハ端しく、口の容ハ止み、聲の容  
ハ静ふ、頭の容ハ直く、氣の容ハ肅し  
く、立つ容ハ徳ふ、色の容ハ莊なり、  
○凡そ人の以て人たる所の者ハ、禮  
義あり、禮義の始ハ、容體を正うし、顔

色を齊へ、辭令を順ふるふ在り、容體  
正しく、顔色齊ひ、辭令順ふて、然る後  
禮義備はる、以て君臣を正うし、父子  
を親しき、長幼を和く、君臣正しく、父  
子親しき、長幼和きて、而る後禮義た  
つ、同上

○凡そ身を修め、家を齊ふるふハ、禮  
を以て、一、禮とハ人倫の作法なり、  
心ふ慎あり、身は則あるを、禮と云ふ、

慎まなく、則ちけきハ、人の心を失ふ  
ひ身の目ざあしく、人小交ハきハ、人  
倫の道たぐひ、家道訓

そき人の禽獸小異あるハ、禮阿れハ  
なり、禮あけきハ禽獸不同、禮を行  
ふハ難く苦き事小非ず、事こと小  
行ふへき道小従ひて行ふ故小心安  
くして、身の行ひ穩りあり、正路なる  
平地を行くハ如し、故小人禮阿れハ

安し、禮あけきハ危し、是を以て人た  
る者ハ禮を行ハざるへからん、同上

○劉忠定賓客を見て、談論時を踰へ  
て、體敬側なく、肩背竦直ふして、身少  
も動らず、手足小至ても、亦移さず、  
○衛侯楚小在り、北宮文子楚の令尹  
圍り容儀の惡きを見て、衛侯小言  
て曰く、令尹將小禍小免きざらんと  
す、詩小曰く、威儀を敬慎す、維民の則

なりと、令尹人  
臣の威儀な  
民これみ則と  
ることなし民  
の則とらざる  
所ありて、民の  
上み有り以て  
終を善くすべ  
からん



侯曰く、何をう威儀と謂ふ、文子曰く、  
威ありて畏るべき、之を威と謂ふ、儀  
ありて象るべき、之を儀と謂ふ、故ふ  
君は君の威儀あり、其臣畏て之を  
愛し、則て之ふ象る、故ふ能く其國家  
を保て、令聞世ふ長し、臣は臣の威儀  
あき、其下畏て之を愛す、故ふ能く  
其官職を守り、族を保ち、家ふ宜し、是  
より以下皆かくの如し、是を以て上

下能く相固まふ

修身初訓卷三終

修身初訓卷三終  
所為の善不善  
は心から出る